

# 八甲田雪中行軍「日記」から考察

## 加藤さん(青森)定説覆す主張

1902(明治35)年1月、旧陸軍青森歩兵第5連隊199人が犠牲になった八甲田雪中行軍遭難事件で、行軍隊の指揮は第2大隊長・山口銀少佐にあって、犠牲者中「幸畑墓苑(青森市)のガイド加藤幹春さん(68)同市」が、中隊長・神成文吉大尉が指揮官だったという従来の見方を覆す主張を展開している。(熊谷慎吉)



山口 銀少佐

※下に加藤さんの考察を基に作成



山口少佐は行軍隊の順着入れ替えや湯堂などの判断を下している。これが神成大尉の指揮との間で混乱を生み、遭難を招いたというのが、定説で、映画「八甲田山」などもこの立場に添って描かれている。

ここには山口少佐をトップとする大隊本部が「編成外」として同行していたという考えが根底にある。編成外とは山口少佐をトップとする大隊本部が「編成外」として同行していたという考えが根底にある。編成外とは山口少佐をトップとする大隊本部が「編成外」として同行していたという考えが根底にある。



加藤 幹春さん

### 小隊長交代「貴重な史料」

#### 長谷川特務曹長 退院直後執筆か

八甲田雪中行軍遭難事件の生存者である長谷川貞三特務曹長が、1902(明治35)年1月23日の行軍出発から3日間の様子を書いた「連隊二報告」草稿に、行軍途中の小隊長交代に関する記述がこれまでに例しなかった。研究者は「貴重な史料」と評価している。

草按は、出発日の動きとして「午食後小隊長ハ特務曹長ト交代セリ、然レドモ第四小隊長ハ交代セザリ」と記述。さらに「長谷川小隊長」「小山田小隊長」との文言もあった。総合すると、第2小隊長・鈴木守登少尉と第3小隊長・大橋義徳少尉が交代したことが明らかになった。研究者は「貴重な史料」と評価している。

信申尉が、出発から半日ほどして、午食後小隊長ハ特務曹長ト交代セリ、然レドモ第四小隊長ハ交代セザリ」と記述。さらに「長谷川小隊長」「小山田小隊長」との文言もあった。総合すると、第2小隊長・鈴木守登少尉と第3小隊長・大橋義徳少尉が交代したことが明らかになった。研究者は「貴重な史料」と評価している。

この画像は雪中行軍遭難資料館ホームページに限り、東奥日報社が利用を許諾したものです。

務曹長が遭難事件直後に書いた「連隊二報告」草稿に、行軍遭難日記の中に、行軍中、複数の特務曹長が小隊長に交代したとする記述が確認された。小隊長は編成上、神成大尉の指揮下に入っている。一方、山口少佐は雪中行軍出発前の1月21日に「小隊長ハ列外者ヲ以テ交代スルコトアルベシ」とする大隊命令を発している。「列外」は組織の一員であることを示す。すなわち、大隊本部と行軍隊を同一組織に位置付けていたからこそ、交代が行われたと加藤さんは結論づけた。

遭難は指揮系統の乱れではなく、想定を超えた悪天候や暴風雪の中で露営するなかで重くなったために起きなかつたことなどが背景にある。長谷川とは別の生存者が「神成大尉はこの行軍の指揮官」などと後に話したことも、「編成外」との考えを補強した。1965(昭和40)年に陸上自衛隊第9師団が発行した「陸奥の吹雪」のほか、新田次郎のベストセラー「八甲田山死の彷徨」や映画「八甲田山」も踏襲している。

指揮系統の乱れが原因と、神成大尉が占める中、加藤さんは行軍隊の編成に違和感を抱いてきた。上官の山口少佐は、中隊長は4小隊長を編成する一との大隊長命令を発していたが、神成大尉の行軍計画では特別小隊長を含め5小隊長となっていた。また大隊本部が存在しないことも、大隊命令と異なっていたためだ。

草按は、同じく長谷川が書いた「雪中遭難記」の中に含まれていた。雑記は八甲田山中行軍遭難資料館(青森市)に展示しているが、加藤さんによると、車按の内容はこれまで明らかでなかった。文面に「2月27日」の日付があり、2月29日に救助された長谷川が、同18日の退院直後に書

いたとされる。加藤さんは元陸上自衛官で、草按を基に組織や職務の観点から考察を深めた。

山口少佐の死の真相などを研究してきた弘前大学名誉教授の松木明知さん(80)は、函館市在住。加藤さんの「理由」について、加藤さんは「戦場はない場所で小隊長を交代した事実が残るのは、他部隊からの評価や部隊の士気に関わる問題だとして、あえて記載しなかつたのではないかと話した。(熊谷慎吉)